OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

大津歴博だより

2009
No.75

平成20年度
新収蔵品の紹介

柴門書屋図　横井金谷筆

蜀道積雪図　横井金谷筆

大津市歴史博物館

平成二〇年度

歴史博物館新収蔵品の紹介

購入資料

1　蜀道積雪図　横井金谷筆　一幅

草津出身で、坂本で没した文人画家の奇僧・横井金谷（一七六一―一八三一）による晩年の大作。金谷は、与謝蕪村風の山水を奔放に表現した独特の作品を描き、近江蕪村の異名を持つが、本作も、大正十一年の『蕪村画集』への収録以降所在不明の蕪村画「蜀桟道図」を模したもの。ただし、蕪村の「蜀桟道図」より、さらに深遠かつ峻険さを増した山水表現となっている。

2　柴門書屋図　横井金谷筆　一幅

金谷が、蕪村画学習を本格的に始めたのは「吾五十有五而志学」（われ五十有五にして学を志す）の遊印を用い始めた時期である。その時期、金谷は名古屋在住であったが、ほどなく近江に移住して餐霞堂という名の画室を坂本に構える。本作は、霞を食べて仙人さながらの気分ですごしたであろう金谷の気分が伝わってくる作品。

3　紀楳亭書状貼交屏風　二曲一隻

与謝蕪村の門人で、大津に在住した紀楳亭（一七三四―一八一〇）が、大津の俳人仲間と交わしたと思われる書状二〇通を貼り交ぜた屏風。蕪村門人でありながら自作の発句をあまり確認できなかった楳亭だが、この書状においては、自然体で次々に発句を詠んでは書き付けている。

○杓も取らず　雪をつまんで　手洗いせん
○雪掃て　四角ふ残す　あき家のかど
○上着壱つ　き替てこけん　今朝の雪

受贈資料

1　大津絞油屋仲間等資料　一四点

大津市・芝田巳千夫氏寄贈

大津絞油屋仲間（同業者組合）の年行事・惣代から、大津代官・京都町奉行に提出された願書の綴じ七冊と仲間鑑札七点からなる。大津町内の他の諸仲間や京都の仲間との争論の様子などを記録したもので、従来明らかではなかった同仲間の実態を知るうえで貴重といえる。また仲間の構成員であることを証明する鑑札は、絞油屋仲間の他、米仲買、水揚仲間、薪問屋仲間のものが含まれている。

2　観念寺鬼瓦　一一点

大津市・観念寺寄贈

浄土宗観念寺の本堂等に葺かれていた鬼瓦一〇点と留蓋（飾瓦）一点。なかでも、正徳四年（一七一四）の本堂下り棟瓦は三面鬼瓦であり、他地域でもあまり見られない貴重なものである。いずれも、作者は松本村（大津市松本）の瓦師として知られる井上七左衛門である。

3　九品寺鬼瓦　六点

大津市・九品寺寄贈

浄土宗九品寺に葺かれていた鬼瓦。注目すべきことは、同寺の瓦製作に、西村半兵衛、飯塚出雲守、清水九太夫と、多彩な瓦師が関与していることである。特に桟瓦の発明者として知られる西村半兵衛作の鬼瓦は、延宝五年（一六七七）と古く、また、飯塚・清水といった松本村瓦師の作品も含まれる。観念寺鬼瓦とともに、かつての大津における瓦生産の実態を示す貴重な歴史資料である。

4　旧滋賀郡小野村文書　五六点

京都市・大原古文書研究会寄贈

かつて大津市内小野村（旧志賀町）に伝わった古文書群。内容は、小野神社境内観音堂に秘仏として伝わる毘沙門天立像（平安時代）の縁起のほか、明治時代後半から大正年間の日記帳、年貢関係の出納帳などからなっている。従来収集されていた同村文書の欠落部分を補える資料として貴重な古文書群と評価できる。

5　瓦製作道具　一一六点

中川製瓦・中川安始氏寄贈

今回の寄贈資料は、平成まで使用されていた瓦の製作道具一式。粘土を切り取って、おおまかな瓦の形にするための成形台や、最終的に瓦の形に

仕上げるロクロ式の調整台、その過程で使用するコテやヘラ、瓦当の文様を作るときの瓦当笵などから構成されており、市内での瓦生産がほぼ絶えてしまった現状の中で、かつての市内における瓦産業の実態や製作方法を今に伝える貴重な文化財といえる。

6　大津鳥瞰図　城下豊榮筆　一点

大津市・岸本登氏寄贈

かつて大津市の湖岸にあった旅館「八景館」のロビーに飾られていた肉筆の鳥瞰図。作者の城下豊榮は、当時のパノラマ鳥瞰図として著名な吉田初三郎の門下と思われるが、詳細は不明。制作年代は、描かれた建物や豊榮の活動時期から推定し、昭和十年代のものと推定できる。当時の大津市内の観光地や史跡などが、丹念に描き込まれており、観光都市大津の歴史を知ることのできる恰好の資料といえる。

第七五回ミニ企画展

「平成二〇年度新指定・新収蔵品展」

●会期
四月二十二日(火)～六月十四日(日)

ここで紹介しました平成二〇年度の新収蔵品と、新に大津市指定文化財となった資料を、右記のミニ企画展でお披露目します。いずれも大津市の歴史と文化にゆかりの深い資料ですので、是非、お越しいただきますよう、お願いします。

〈購入資料〉

紀梶亭書状貼交屏風から

【書状新文】　※太字は発句

けさの雪はミやこも
嶋（さぞ）ふりつむほど
隔たたれしいにしへの
ことのみおもひ出し
雪降あしたには
早々おき、馳川君の
来り給ふを待て
寒山のくる道あけん
今朝の雪とたわれしを
ここにかひつけてへだらし
友をおもひ、今ごろは
川辺なるけふのけしきを
ながめやりたまふやらん
我も五、六歩あゆミ出て
天台山の雪を
遠望して
同じ雪京と
大津や

裏表

戎庭の風情
重たしと動イて
くれな雪の竹
かうしより

さしのぞきて
雪掃て四角ふ
残すあき家のかど
上着忘ツさ替て
こけん今朝の雪
右故人の句をおもひ出て
誰か先へ控へてあろふ
雪の菅戸
杓も取らず雪を
つまんで手洗せん
今朝の雪に
このごろの
ほ句おもひ出し、こゝに
かひつく、如何書評
ねがひあげ候
しからずと牛追て
行雪の橋
何やらん向ひに
人声を聞きて
此雪に直限（値切）らんと
やき米の駄賃

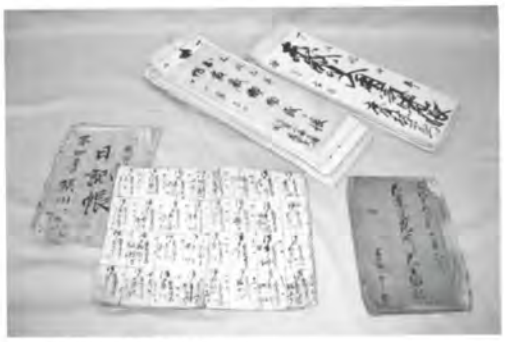
〈受贈資料〉

1　絞油屋仲間他鑑札

3　九品寺西村半兵衛作鬼瓦

2　観念寺三面鬼瓦

5　瓦製作道具・調整台



4　旧滋賀郡小野村文書

6　大津鳥瞰図 城下豊榮筆

大津鳥瞰図 部分

学芸員のノートから

側縁を打ち欠いた軒平瓦

南滋賀廃寺から出土する軒平瓦の中に、流れる雲をデザインした飛雲文（流雲文ともいいます）を配した奈良時代の軒平瓦があります。当館で保管している近江神宮所蔵南滋賀廃寺出土資料の中に、瓦当部から平瓦端部まで残存するほぼ完形の飛雲文軒平瓦が二点あります。この二点をよくみてみると、瓦当面に向かって左側の側縁全体が割れていることに気付きます。また、瓦当部は欠損していますが、製作技法や胎土から飛雲文軒平瓦の平瓦部とみられる資料も一点あり、同様に瓦当面に向かって左側の側縁が割れています。これら三点が同じような状況にあることから、屋根からの落下により自然に割れたものではないと考えられます。さらに軒平瓦を詳細に観察してみると、側縁を人工的に打ち欠いていることがわかります。それでは、なぜこの様に一方の側縁を打ち欠く必要があったのでしょうか。この答えのヒントが南

南滋賀廃寺出土飛雲文軒平瓦1（近江神宮蔵）

南滋賀廃寺出土飛雲文軒平瓦2（近江神宮蔵）

滋賀廃寺の境内で発見された瓦窯跡から出土した飛雲文軒平瓦の中にあります。

平成三年度の南滋賀廃寺発掘調査において、寺域西辺を画する溝状遺構の内側で瓦窯跡が発見されました。検出された瓦窯は半地下式の平窯とみられ、丸瓦・平瓦のほか、飛雲文軒平瓦を焼成されていた可能性が高いと考えられています。この飛雲文軒平瓦は、両端から中心に向かって左右三単位ずつの雲を配しています。瓦当面は幅二九・七cm、厚さ四・三cm、全長三八・〇cmです。この軒平瓦の特徴は、瓦当部の横断面が端面部（尻部）に比べて強く反ることです。この瓦当部の強い反りがキー・ポイントになります。この飛雲文軒平瓦は瓦窯跡で出土していることから、屋根に使用される前であることは明らかです。

このような反りの強い軒平瓦を屋根に葺けばどのようなことが起こったのでしょうか。おそらく、軒平瓦と軒平瓦との間に乗る軒丸瓦が浮いた状態になり、うまく軒先が納まらなかったのではないかと想像されます。軒平瓦と軒丸瓦とをうまく納めるためには、軒平瓦の反りを弱くする必要がありますが、すでに焼成された瓦では反りを変えることは不可能です。そこで、一方の側縁を打ち欠き、弧深（瓦当面中央部の上端から側縁上端までの距離）を浅くしたのではないでしょうか。南滋賀廃寺境内瓦窯跡から出土した飛雲文軒平瓦の弧深が約九cmであるに対して、側縁が打ち欠いた飛雲文軒平瓦の弧深は五cm前後となります。このような現場対応で、軒丸瓦をうまく納めたのではないかと推定されます。これが、なぜ南滋賀廃寺出土飛雲文軒平瓦の一方の側縁を打ち欠いていたのか、という問いに対する答えです。

それなら、なぜ初めから反りの緩やかな軒平瓦を製作しなかったのでしょうか。瓦製作工人と瓦葺き工人との間に意思疎通はなかったのでしょうか。瓦製作工人は屋根に葺きにくいことを知っていて、軒平瓦を造っていたのでしょうか、それとも知らなかったのでしょうか。なかなか明確な答えは見出せませんが、まず、最初に反りの強い瓦当笵が存在し、それに合わせて軒平瓦が製作されたのではないのでしょうか。端面部（尻部）の反りに比べて瓦当面の反りを強くしなければならなかったことからも頷けます。それならなぜ初めから、反りの緩やかな瓦当笵を製作しなかったのでしょうか。この疑問については、現在のところまだ明確な答えを持ち合わせていませんが、今後検討していきたいと思います。

いずれにしても、この飛雲文軒平瓦を見るたびに、現場で軒平瓦の側面を打ち欠きながら、「なぜこんな瓦を造ったのか」という瓦葺き工人たちの溜息が聞こえてきそうです。

（学芸員　青山　均）

上：南滋賀廃寺境内瓦窯跡出土飛雲文軒平瓦
中・下：南滋賀廃寺出土飛雲文軒平瓦1・2

ミニ企画展

柴田晩葉（ばんよう）　大正日本画in大津

■平成21年6月16日(火)～7月26日(日)

現代では、知名度が薄れてしまったものの、市内には意外なほど作品が残されていることに驚く画家がいます。本展で取り上げる柴田晩葉（一八八五―一九四四）もそのひとりです。戦前は、大津で書画会を開催し（渡辺公観と共催）、席上で揮毫した扇子画や色紙などが飛ぶように売れたという人気振りでした。

その彼は、明治一八年、大津・新町の教育家の家に生まれました。京都美術学校から京都絵画専門学校に進み、本科研究科を卒業したのち、改めて山元春挙の門に入りました。画壇活動を考慮したのでしょうか。以後、彼に対する評価も順調でした。文部省美術展覧会では、大正元年の第六回展をはじめ、七回、一〇回、一二回に入選を果たし、またサンフランシスコ万国美術展覧会にも選抜されて出品し、銀牌を受賞したほか、同八年には、『現代　滋賀懸人物史』にも県下の政財界人にまじって登載、かつ巻頭口絵にも彼の作品が掲載され、堂々たる名士の扱いです。こうしてみると、いかにも時流に乗って成功した画家のように見えますが、作品をみると、とても優しい詩情をただよわせた作品が多いことに気がつきます。本人自身はごく自然体で作画しており、良い意味で師の春挙風とは異なった、感覚的な造形に魅力を発揮した画家なのです。まさに、大正ロマンの時代に活躍した画家といえるでしょう。今回は、大作小品とりまぜて、大正期の晩葉作品を紹介いたします。

寿老人　個人蔵

石山寺源氏之間　石山寺蔵

帰帆　個人蔵

大佛の鐘　個人蔵

大津市歴史博物館
〒520-0037　大津市御陵町2-2　☎(077)521-2100
ホームページ　http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp